

令和2年度 東国文化自由研究レポート



研究テーマ

小泉古墳群について

提出日 令和2年8月24日



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 3組 15番

氏名 城 愛実

はじめに

私の出身は玉村町である。玉村町には古墳がたくさんある。その多くはいまだに発掘調査がされていないといわれている。天災によって埋まった、農地開墾のために人工的に平らに

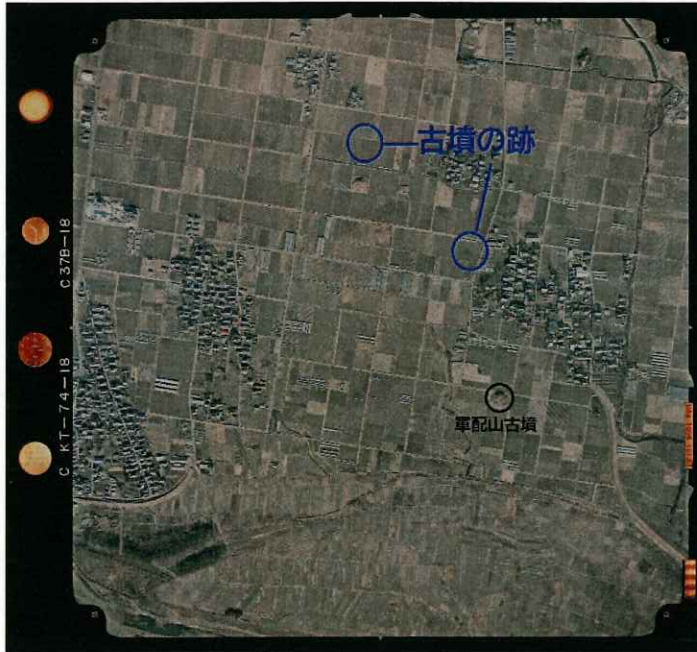


図1 軍配山古墳付近のクロップマーク



図2 軍配山古墳



図3 芝根小から見た 際の泥流や、天明の浅間山大噴火の火山灰が堆積した荒れた土地であつたという。玉村町小泉の墾田紀功碑には、この旨が記されている。(図4) この天災のお陰で玉村町の遺跡は比較的良好な状態で発掘される事が多い。その代表的な例が小泉古墳群である。この古墳群について調べてみた。

た際の泥流や、天明の浅間山大噴火の火山灰が堆積した荒れた土地であつたという。玉村町小泉の墾田紀功碑には、この旨が記されている。(図4) この天災のお陰で玉村町の遺跡は比較的良好な状態で発掘される事が多い。その代表的な例が小泉古墳群である。この古墳群について調べてみた。

したなどの理由があり、解明されていない謎が多い。

私はこのレポートを書くにあたって、玉村町立歴史資料館を訪れ、学芸員さんに話を聞くことが出来た。玉村町の航空写真を見ると、クロップマークがたくさんあるというので、調べてみた。クロップマークとは、火山や洪水などの天災によって埋まってしまった古墳の跡が、周囲との土壌の違いにより、そのうえの植物の生育に差ができて生じる自然の文様のことだ。調べてみるとクロップマークはたくさんあつた。

例えば図1は、軍配山古墳の近く

の写真である。青い丸で囲まれているところは畑と色が違うのは分かると思う。これもクロップマークである。この下を掘ると何らかの遺跡があると思われる。

図3もクロップマークである。図3は私の出身小学校の玉村町立芝根小学校から見た近隣の麦畑の写真で辺一帯は戦前に田畑として開墾されるまでは、利根川が氾濫した



図4 小泉 墾田紀功碑

小泉古墳群

小泉古墳群は、玉村町立芝根小学校の周辺にある古墳群である。芝根小学校移転工事のとき、発見され発掘調査が行われた。この古墳群



図5 小泉古墳群 想像図

は発見されている古墳だけで1号から22号まである。今では住宅街と田畑が広がっているが、7世紀には図5のような古墳群が広がっていたと推定されていた。その中でも特に珍しい出土品が出ている古墳は、大塚越3号古墳、大塚越10号古墳、長塚1号古墳である。今回はこの3つの古墳について詳しく記す。

・小泉大塚越3号古墳

名称	小泉大塚越3号古墳
所在地	佐波郡玉村町大字飯倉98
墳形	前方後円墳
古墳のサイズ	全長55m・前方の最大幅推定32m・後円部の直径19m
出土品	金属製品（金銅製単鳳環頭太刀）・須恵器・土師器・玉類・円筒埴輪・ 形象埴輪
	（人物・馬形・器材形）装身具・武器・工具・馬具・人骨

中心はほぼ東西を通り、後円部が西を向いている前方後円墳である。二層構造で、二段階目の葺石は比較的きれいに残っている。埴輪列は上段の葺石から後円部では2.5m~3m離れた位置に整然とならんでいて、確認できた埴輪の数は356本を数える。（図6）

石室の構造は横穴式両袖型石室で、盗掘にあったのか、側壁と奥壁は2段がのこっているだけである。比較的大振りな角閃石安山岩を使用しており、玄室の広さは奥壁部で1.8m、徐々に狭くなり、入り口である玄門部では1.5mである。角閃石安山岩とは、六世紀中頃に榛名山が噴火した際に噴出した軽石である。柔らかく加工が容易で、その姿が美しいことから石室の材料に使用されたと思われる。



図7 石室内遺物出土状態

石室内はかなり破壊されており、埋葬当時の位置にあると推定される遺物は須恵器のツボくらいである。(図7) 直刀などは折れ曲がって壁に押し付けられている状態で発掘された。

図6 人物埴輪 馬子



この石室は埋め戻され、当初の工事予定を変更して芝根小敷地内に保存されている。(図8)



図8 芝根小敷地内 石室

出土物は金銅製単鳳環頭太刀などの金属製品、須恵器、土師器、玉類、円筒埴輪、形象埴輪(人物、馬形、器財形)が出土している。石室からは単鳳環頭たちなどの武器、環状鏡板付轡などの工具、馬具、土師器、須恵器などの副葬品が出土している。これらの特徴から、この古墳が造られたのは六世紀後半と推定される。

・小泉長塚1号古墳

名称	小泉長塚1号古墳
所在地	佐波郡玉村町大字小泉142
墳形	不明(前方後円墳 or 円墳)
古墳のサイズ 不明()	不明(形及び規模が確かではないため)
出土品	金属製品(単鳳環頭太刀)・須恵器・土師器・玉類・円筒埴輪・形象埴輪(人物・馬形・家型)



図9 形象埴輪 馬

墳形は、前方後円墳か円墳か分かっていない。墳丘は2段構造で1段には幅5m以上のテラス面がある。調査の関係でこのテラス面の外側端と周堀の内側端、周堀の外周は確認できなかった。2段目には河原石を使った葺石が施されていましたが、1段には葺石がなかったものと考えられている。2段は40から50cm程度が残っているだけで、それより上は1783年以前に削られていることが分かっている。前庭部東側のテラス面からは人物埴輪・馬形埴輪が出土している。(図9)石室の構造は横穴式両袖型石室である。南西方向に開口する。天井石、奥壁石は既に消失していた。残存していた側壁石は根石を除き内側に向かい倒壊していた。使用石材は角閃石安山岩である。小泉大塚越3号古墳と同じである。石室内には多量の人骨が散乱していた

が、推定15体の人骨が埋葬されていたと考えられている。また、副葬品は単鳳環頭太刀などの金属製品、須恵器、土師器、玉類、円筒埴輪、形象埴輪(人物・馬形・家型)が出土しており、小泉大塚越3号古墳とほぼ同様である。これらの特徴から、この古墳が造られたのは六世紀後半と推定される。

・小泉大塚越10号古墳

名称	小泉大塚越10号古墳
所在地	佐波郡玉村町大字小泉121-1 122-1・-2
墳形	不明(円墳と推測される)
古墳のサイズ	周溝の内径約18m・外径は約21mと想定される。
出土品	武器・玉類・金属製品・工具・装身具・土師器・人歯

墳形は不明であるが、円墳と推定される。墳丘は残存していなかったため、構造は詳しく分かっていないのだが石の配列に規則性がなく、石の周囲の土は砂質土であったため近世に崩落した葺石を積みなおしたか、畑にあった石を端に寄せたものと想定される。近世に積み直したのだったら、何らかの記録が残っている可能性もあるので、旧家からの古文書の発見が待たれる。石室は両袖型横穴式石室である。この古墳も前の2つの古墳と同様、角閃石安山岩を使用している。南西方向に開口する。副葬品は武器、玉類、金属製品、工具、装身具、土師器、人歯（100本以上）が出土した。埴輪を伴わないことから、この古墳が造られたのは七世紀と推定される。

綿貫観音山古墳と小泉大塚越3号古墳の類似点

埴輪列	良好な埴輪列・前方部東側に馬形埴輪と馬引きの埴輪が列状に配置
石室	榛名山噴火由来の角閃石安山岩・「角閃石安山岩削石積石室」
副葬品	環頭太刀 外来系の希少なものが目立つ

まずは、綿貫観音山古墳について説明する。私はこの古墳について調べるために群馬県立歴史博物館に行ってきた。そこではちょうど、「綿貫観音山古墳のすべて」という企画展が開催されていた。展示されていたのは、中国由来と考える銅水瓶や同じ型から造られた鏡が朝鮮半島でも発見された「獣帯鏡」、金銅製の帯や馬具、鉄甲など綿貫観音山古墳の出土品382点と関連する考古遺物の計634点。国宝24点、重要文化財が470点と

いう豪華なものだった。実はこの古墳の出土品はさらに国宝になろうとしているものがある。国宝になると、400点以上の国宝が認定されることとなる。

綿貫観音山古墳と小泉大塚越3号古墳は様々なところが類似する。私はこれが気になりこの事について調べてみた。

例えば、埴輪列や石室、副葬品についてである。埴輪列はどちらの古墳も良好な埴輪列である。(図10)類似点としては、馬と馬子の配置がどちらも方墳の前側にある。さらに埴輪の生産地はこの2つ共同であり、どちらも藤岡市と分かっている。詳しくすると、本郷埴輪窯跡・猿田

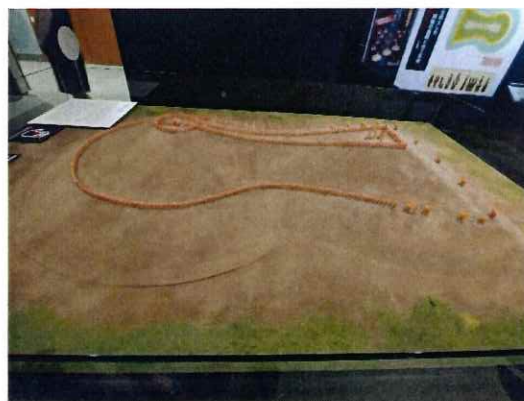


図10 綿貫観音山古墳 埴輪配置模型

埴輪窯跡の2地点だ。玉村町には2タイプの埴輪（混入物から産地特定）がある。タイプ1（鐮川・烏川流域の藤岡産埴輪）は結晶片岩が混入しており、海綿骨針が粘土に含まれていた埴輪である。上記企画展ではこの結晶片岩をルーペで直接確認することもできた。小泉古墳群以外にも綿貫観音山古墳などの県内の主要古墳にも使用されている。タイプ2（利根川流域の生産）は角閃石安山岩が混入しており、仮の名称として「角安混入埴輪」と呼称されている。これらのことから2つの古墳の埴輪は藤岡市で作られたことが分かる。

石室は、榛名山が噴火した時の角閃石安山岩を使用した角閃石安山岩削石積石室である。角閃石安山岩は加工しやすく、榛名山の噴火の影響でたくさんあったので、使われたと考えられる。



図11 小泉大塚越3号古墳 石室測壁

(図11)

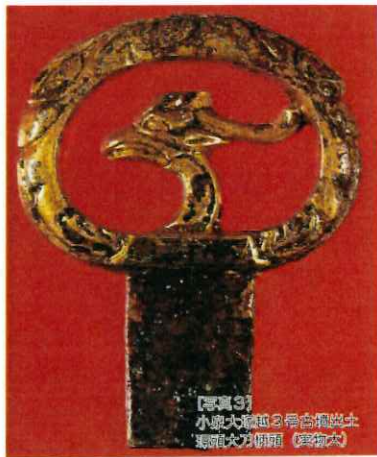


図12 小泉大塚越3号古墳 単鳳環頭太刀

副葬品はどちらも外来系の希少なものが目立つ。特に環頭太刀は特筆に値する。群馬県内では二十数本の環頭太刀が発掘されている。綿貫観音山古墳で見つかった三累環頭太刀や、小泉古墳群で見つかった単鳳環頭太刀(図12)、等々である。これらの副葬品は貴重なものであり、小泉大塚越3号古墳で見つかった単鳳環頭太刀は特に貴重なものである。単鳳環頭太刀は柄頭が見つかっており、幅5.8cmの横長楕円形の環の中心に1羽の鳥の頭の部分が表現されている。ここに表現されている鳥は、中国の想像上の鳥である鳳凰だと考えられている。このデザインの太刀は環内に1羽(単体)の鳳凰が表現されていることから単鳳環頭太刀と呼ばれている。鳳凰は顔を横に向けて細くとがった口ばしを閉じている。頭頂の3つの冠毛はくっついて三山状になっている。後毛(角)は長く弓なりに延び、環に接している。全体的に簡略気味だが、細かな部分まで丁寧に作ろうとしていることが分かる。この柄頭は金銅製で、銅あるいは青銅を溶かして鋳型に流し入れて環と鳳凰、刀身と接続するための茎の部分の部分を一体に作っていた。表面には鍍金(メッキ)が施されている。この太刀は日本で作られたものではなく、中国や朝鮮半島のものだと考えられている。この太刀が見つかったことで当時の日本は外国と深い関係があったことが分かった。

最後に

前章のように、このふたつの古墳には類似点が非常に多い。同一人物による設計指導があったか、もしくは同氏族が埋葬されている可能性が高い。出土人骨によるDNA鑑定などができれば、面白いのではないだろうか。また、このふたつの古墳に永眠している人は、当時勢力を持っていて、外国との関係が深い人だったのではないのだろうか。外国と関係が深ければ、単鳳環頭太刀などの珍しいものがあったもおかしくないだろう。私の考えがあっているのか間違っているのかは分からない。その理由はまだ解明されていないからである。できるだけ早く解明されてほしい。

参考HP

<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>

国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス 8月16日閲覧

<http://shibane.seesaa.net/upload/detail/image/P1220264-a6367-thumbnail2.JPG.html>

芝根小ブログ 8月16日閲覧

<https://artexhibition.jp/topics/news/20200721-AEJ268999/>

美術展ナビ 8月20日閲覧

参照図	
図1	国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス 昭和50年撮影 https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do 令和2年8月16日閲覧
図2	著者撮影 令和2年8月21日
図3	芝根小学校ブログ http://shibane.seesaa.net/upload/detail/image/P1220264-a6367-thumbnail2.JPG.html 令和2年8月16日閲覧
図4	撮影著者 令和2年8月16日
図5	玉村町歴史資料館常設展示 撮影著者 令和2年8月12日撮影
図6	玉村町歴史資料館常設展示 撮影著者 令和2年8月12日撮影
図7	『小泉大塚越3号古墳と小泉長塚1号古墳』P2
図8	芝根小学校ブログ http://shibane.seesaa.net/upload/detail/image/P1220264-a6367-thumbnail2.JPG.html 令和2年8月16日閲覧
図9	玉村町歴史資料館常設展示 撮影著者 令和2年8月12日撮影
図10	群馬県立歴史博物館 第101回企画展「綿貫観音山古墳のすべて」 撮影著者 令和2年8月12日撮影
図11	『小泉大塚越3号古墳と小泉長塚1号古墳』P2
図12	『小泉大塚越3号古墳と小泉長塚1号古墳』P1

参考文献			
著者・編者	書名	発行	発行日
群馬歴史文化遺産発掘・活用発信実行委員会	群馬の歴史文化遺産—古代—調査報告書	群馬歴史文化遺産発掘・活用発信実行委員会	平成26年3月
玉村町立歴史資料館	玉村町の地区の歴史III芝根地区編	玉村町立歴史資料館	平成22年
玉村町立歴史資料館	小泉大塚越遺跡10号墳	玉村町立歴史資料館	平成12年
玉村町立歴史資料館	小泉大塚越3号古墳と小泉長塚1号古墳	玉村町立歴史資料館	平成20年